

## 人工股関節全置換患者の QOL に関する研究

泉 キヨ子\* 金 川 克 子\* 土 屋 尚 義\*\*  
金 井 和 子\*\* 松 本 忠 美\*\*\*

### KEY WORDS

人工股関節置換患者, QOL

### はじめに

我々は、人工股関節全置換術を受けた患者の患者教育や継続看護を目的に、退院後の日常生活の回復状況について調査を進めている。これまで手術後ほぼ12カ月後には、困難な日常生活活動（ADL）もほとんど回復していくものが多いことを確認できた<sup>1)2)</sup>。そこで、人工股関節全置換患者は、徐痛効果やADLの拡大により、術前に比べて術後の生活の満足度も高いのではないかと考えた。

今回、人工股関節全置換患者の Quality of Life (QOL) について質問紙を用い、事後調査した。なおここで、QOL とは主観的な生活の満足度と定義した。

### 方 法

1. 対象はK大学医学部附属病院で1987年7月から1990年1月までに人工股関節全置換術を受け、術後12カ月以上、24カ月未満の患者36名に質問紙を送付し、有効回答が得られた25名（回収率は69%）である。

2. 測定用具は、Selman<sup>3)</sup>のMODIFIED ARTHRITIS IMPACT MEASUREMENT SCALES を使用し、自己記入による郵送法で調査した。このスケールは、ARTHRITIS IMPACT MEASUREMENT SCALES<sup>4)</sup>を修正して、人工股関節全置換患者の身体的、社会的、精神的な安寧を測定できるとされ、Roy の適応モデル<sup>5)</sup>をベースにつくられている。即ち、活動性、可動性、ADLなどを現す①生理的機能( Physiologic Function ), 自己の喜び、安心、抑うつ、不安など、つまり人間が自分自身について

もっている信念と感情から構成される②自己概念( Self Concept ), 日常生活でのかかわりや家庭での役割、つまり人間が行動できるために、他人との関係において知ることとして③役割機能 ( Role Function ), 親戚や友人との関わり状況、つまり他者を愛し、尊敬し、価値づける意志と能力、およびそれらに反応する意志と能力として④相互依存 ( Interdependence ) である。これら4変数を中心に、手術の満足度や術後の健康観などを入れて56の質問項目から構成されている。4変数の質問項目数と採点方法は表1に示した。質問項目の一部は表2に示した。

### 結 果

#### 1. 対象の構成

対象の構成は表3に示した。女性がほぼ90%を占めていた。年齢は39~84歳であり、平均年齢は57.4±

表1 Modified arthritis impact measurement scales

#### ROY モデル

- (1) 生理的機能 [ Physiologic Function ]  
…19 (質問項目)
- (2) 自己概念 [ Self Concept ] …13
- (3) 役割機能 [ Role Function ] … 6
- (4) 相互依存 [ Interdependence ] … 4

#### 採点方法

- 手術前後変化なし … 0点
- 術後肯定的な反応 … +1, +2点
- 術後否定的な反応 … -1, -2点

\* 金沢大学医療技術短期大学部・看護学科  
\*\* 千葉大学看護学部附属看護実践研究指導センター  
\*\*\* 金沢大学医学部・整形外科

表2 MAIMS<sup>1)</sup>の質問項目

1. 手術前と比べて、歩いたり、移動するとき、どのくらい人に助けてもらうか。
① ( ) 現在の方が人に助けてもらうことが多い。
② ( ) 現在の方が人に助けてもらうことが少ない。
③ ( ) 手術前と同じくらいである。
2. 手術前と比べて、どのくらい公共の交通機関を利用しているか。
① ( ) 現在の方が多い。
② ( ) 現在の方が少ない。
③ ( ) 手術前と同じくらいである。

1) Modified Arthritis Impact Measurement Scales

表3 対象の構成 n=25

性別	男	3名(12.0%)
	女	22 (88.0)
年齢別	~40歳	2 ( 8.0)
	41~60	12 (48.0)
	61~80	10 (40.0)
	81~	1 ( 4.0)
疾患別	変形性股関節症	13 (52.0)
	大腿骨骨頭壊死	6 (24.0)
	慢性関節リウマチ	5 (20.0)
	大腿骨頭部骨折	1 ( 4.0)
手術	人工股関節全置換術	18 (72.0)
	人工骨頭置換術	7 (28.0)
職業	あり	8 (32.0)
	なし	17 (68.0)

11.1歳であった。主な疾患は変形性股関節症が13名(52%)と最も多く、次いで大腿骨骨頭壊死6名(24%)、慢性関節リウマチ(RA)5名(20%)の順であった。RAのうち2名は調査時も転院先に入院中であった。手術では人工股関節全置換術が18名(72%)であり、人工骨頭置換術が7名(28%)であった。職業では仕事に就いている者が8名(32%)であった。

2. 4変数の関係

生理的機能の手術前後の変化の程度の分布を図1に示した。平均得点±標準偏差は8.3±7.4点であり、術前に比べて術後の方がよい反応を示した者が21名(84%)と最も多くみられ、うち48%は1~10点の範囲であった。同様にして、自己の安心や不安などをあらす自己概念の分布を図2に示した。平均得点は2.6±6.0点で、ばらつきはあるものの術後に肯定的な反応が19名(76%)にみられた。役割機能については図3に示した。役割機能の平均得点は2.4±3.2点であり、18名(72%)が術後により反応を示した。さらに、親戚や友人との関係などをあらわす相互依

存について図4に示した。この質問項目が4つと少なく、平均0.4±2.2点であり、術後肯定的な反応と否定的な反応がほぼ半数づつであった。

生理的機能、自己概念、役割機能、相互依存の4変数間の相関マトリックスを表4に示した。すべての変数間に相関がみられた(p<0.005)。高い相関を示したのは、生理的機能と役割機能(r=0.74)、生理的機能と相互依存(r=0.74)であった。生理的機能と役割機能であった。即ち、ADLや活動性、可動性が高まることで、家庭での役割を果たしているものが多いこと、親戚や知人との関係が良くなったものが多いことが確認された。

3. 手術の満足度について

手術したことを満足している(含む、かなり満足している、とても満足している)とした者は22名(88%)にみられた。一方、かなり失望しているとした者は3名(12%)であった。かなり失望しているとした者を4変数との関係でみると、3名共に相互依存の点数が術後否定的な反応であった。

考察

今日医療は、患者の生命を長く守ることから生命や生活・人生の質を保証すること、即ちその人のQuality of Lifeを高めることの必要性が叫ばれてきている。我々も人工股関節全置換患者は、手術によって痛みは和らぎ、ADLが拡大してもその患者の日々の生活に役立っているかを問うことは看護上、極めて重要であると考え。QOLについて、米国を中心にさまざまなスケールが開発されているが、本邦ではまだ少ないのが現状である。今回 Selman のスケールを日本語訳して使用した結果、人工股関節全置換患者は術後のあらゆる生活において肯定的な反応が多く、ADLや活動性、可動性が高まることで、心理的な安定や家庭でのさまざまな役割を果たしているものが多いこと、手術の満足感が高い者が多いことなどが

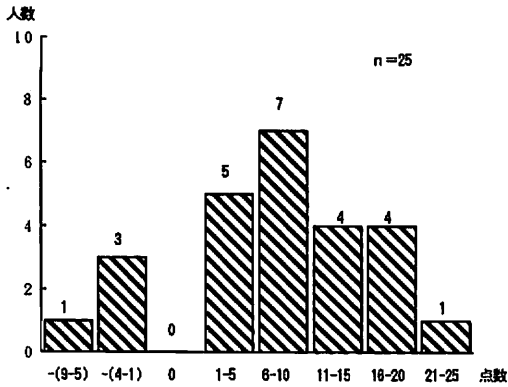


図1 生理的機能の分析状況

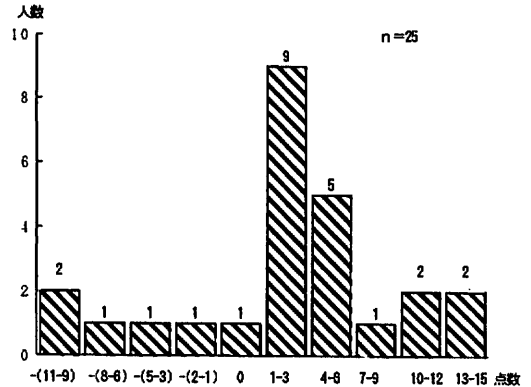


図2 自己概念の分析状況

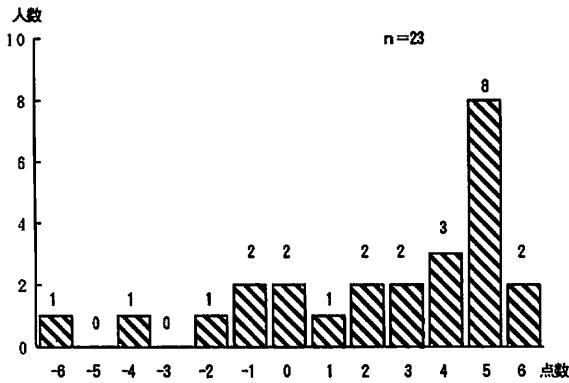


図3 役割機能の分析状況

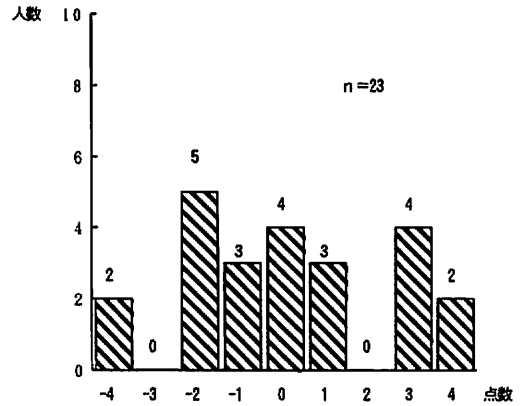


図4 相互依存の分析状況

表4 変数間相関マトリックス

	生理的機能	役割機能	相互依存	自己概念
生理的機能	1.00	0.74	0.74	0.70
役割機能		1.00	0.59	0.60
相互依存			1.00	0.69
自己概念				1.00

p < 0.005

確認された。また、Selman は変形性股関節症患者についてのみの報告であったが、今回の結果とほぼ類似の傾向を示した。

つまり、人工股関節全置換術は患者の生活の満足度の改善に有効な方法と思われた。

今後は、個々の事例のQOLを高める要因や得点の低い事例についても検討し、個々の患者教育に生かしたい。さらに、このスケールの有用性についても

検討したい。

#### まとめ

人工股関節全置換術を受けた患者25人のQOLについて、MODIFIED ARTHRITIS IMPACT MEASUREMENT SCALESを使用し、生理的機能、自己概念、役割機能、相互依存の4変数を中心に検討した。

1. 手術前後の変化では、活動性、可動性、ADLなどを表す生理的機能について肯定的な反応が21名(84%)と最も多く、次いで自己概念、役割機能の順であり、ともに70%以上であった。

2. 生理的機能、自己概念、役割機能、相互依存のすべての変数間に高い相関がみられた。とくに、生理的機能と相互依存、生理的機能と役割機能は高い相関を示した。

3. 手術の満足度では、満足しているとした者が22名(88%)にみられた。

本研究の要旨は第17回看護研究学会(千葉)で発

表した。

文 献

- 1) 泉キヨ子, 金川克子他: 人工股関節全置換術患者における日常生活の回復過程に関する研究—術後6カ月のADLの回復の推移について—: 金沢大学医療技術短期大学部紀要, 第13巻: 21-24, 1989.
- 2) 泉キヨ子, 金川克子他: 人工股関節全置換術患者における日常生活の回復過程に関する研究—術後12カ月のADLとROMの回復の推移について—: 金沢大学医療技術短期大学部紀要, 第15巻: 67-71, 1991.
- 3) Selman, S.W.: Impact of total hip replacement on quality of life, Orthopaedic Nursing, Vol. 8, No.5: 43-49, 1989.
- 4) Meenan, R.F. et al: Measuring Health Status in Arthritis, Arthritis and Rheumatism, 23(2): 146-152, 1980.
- 5) Rienl, J.P., Roy, S.C., (兼松百合子, 小島操子監修): Conceptual Models for Nursing Practice 看護モデル その解説と応用ロイの適応モデル: 日本看護協会出版会, 251-269, 1985.

The impact of total hip replacement on quality life

Kiyoko Izumi, Katsuko Kanagawa, Takanor Tsuchiya  
Kazuko Kanai, Tadami Matsumoto